

文献紹介

ヴィゴツキー理論の実践的可能性

Vygotsky at work and play
Lois, Holzman. (2009). NY: Routledge.

横山 草介

Sousuke Yokoyama

青山学院大学大学院社会情報学研究所
Graduate School of Social Informatics Aoyama Gakuin University

1. ロイス・ホルツマン

著者ロイス・ホルツマン (Lois Holzman) は、ニューヨークの East Side Institute for Group and Short Term Psychotherapy のディレクターである。同組織は、ホルツマンの盟友であったフレッド・ニューマン (Fred Newman) と共に1980年代半ばに設立されたものであり、今日まで心理学、心理療法、教育、コミュニティビルディングなどの諸分野に向けられた人間学的なアプローチの探求と革新的な実践を国際的視野にたって展開してきた研究機関である。

同機関はマルクス (Marx)、ヴィゴツキー (Vygotsky) の諸理論を土台とする社会・文化・歴史的活動理論をその方法論的な枠組みとして採用し、人々の社会的な活動や、生の創出と結びついた革新的で実践的な探求をすすめてきた。また同組織は、現実世界における人々の社会的実践と、関係を軸とする一連の学習-発達理論とを統合的に探求していく具体的活動の創出を展望している。教育、心理療法、企業、コミュニティの現場で実現されるこれらの活動はいずれも、「なりうる存在 (becoming)」としての可能性の中で社会的な関わり合いを通して営まれる協同的な意味構築過程が、人間の学習-発達プロセスに根源的なものであるという理論的志向に根ざしたものである。

本稿は、著者ロイス・ホルツマンがマルキシズムを経由する心理学者、ヴィゴツキーの理論に依拠して実践してきたこれまでの取り組みと、その基本的な理論フレームについて概説した2009年の著書「Vygotsky

at work and play」を紹介するものである。尚、訳出しの困難な固有名詞や日本語への無理な翻訳によって著者の意図が損なわれる可能性のある部分については原語のまま表記した。また本文中、著者はロイス・ホルツマンを、著書は「Vygotsky at work and play」を指すものとする。

2. マルクスとヴィゴツキー

著者は、今日、文化・歴史的活動理論、ないし社会・文化的活動理論などと呼ばれ展開を進めてきたヴィゴツキー理論を、「人間の学習-発達を、文化的、歴史的、社会的な諸関係を通して生成されるものとして捉える立場」(第一章)として概説する。その上で、ヴィゴツキーが人間の発達に関わる諸問題の探求において心理学的な概念による二元論的なアプローチを拒み、その相克として弁証法的なアプローチによる探求をすすめた点に注目する (p.3)。特に心理学の学的潮流における認知 (cognition) と感情 (emotion) との二元概念化への異議が論じられ、この二元論の採用が今日の心理学、教育を誤った方向に導いてきたという警鐘が呈せられる。著者は、この警鐘への実践的応答として哲学者であるフレッド・ニューマン (Fred Newman) と共にソーシャルセラピーの文脈の中にヴィゴツキー理論に依拠した実践を試みており、その取り組みは本書の第二章において示されている。

著者は、ヴィゴツキー理論をマルクスの遠大な仕事の心理学への拡張として理解する。マルクスにおいて

人間は本質的に社会的な存在である。個人は社会の二元的な対置物ではなく、個人はその原初において社会的存在として捉えられる。著者はこのテーゼの中に二人のマルクスを措定する。一方には、急進的な社会・文化・歴史的人間主義に立つ哲学者としてのマルクスであり、他方では、物質主義の経済・社会学者マルクスである。ここで焦点を当てられるのが二人のマルクスにおける「活動」の概念である (pp.15-16)。

著者によれば哲学者マルクスにおいて「活動」とは、根源的に社会的、協同的、省察的、再構築的なものであり、人々自身と、人々のおかれた状況との全体的な変革を意味する概念である (p.15)。他方、経済学者としてのマルクスにおいて「活動」とは、歴史的に変容を遂げていく人間の行動と意識に対する労働の役割を強調する概念であり、ここでの人間は、労働を通して、また、道具を使用することを通して自然を操り、自己を変革していく存在である (p.15)。

マルクスにおいて人間の活動と精神とは、その起源において社会的なものとして捉えられる (p.15)。著者は、ヴィゴツキーは「社会的活動」と「社会的精神」というマルクスの考え方に依って彼の心理学における理論的な基盤を構築し、心理学における脱二元論的な分析単位を採求したと理解する。そして、主観と客観という二元論を拒否し、精神と活動との弁証法的総体として人間研究にアプローチしようとした点をヴィゴツキーの偉業の一つとして位置づけ、著者自らの理論的な基盤としている。

3. 「である」(being) から 「なりうる」(becoming) へ

著者は、ヴィゴツキー理論を精神発達についての理論ではなく、可能態 (becoming) としての人間の理論として位置づける (p.17)。つまり、人間存在を固定的な存在 (being) として捉えるのではなく、何ものかになりうる (becoming) プロセスの途上にある存在として捉える理論として位置づける。著者は「なんであるか」ではなく「何になりうるか」という心理学的な問い方をヴィゴツキーの多くの著述の中に見出すことができるとする。例えば、ヴィゴツキーの最近接発達領域の概念における発達は、可能態としての自己、

何ものかになりうる存在としての自己と、今ここでの自己とのあいだの動的な弁証法関係として捉えられる。著者の理解において最近接発達領域は、何らかの領域のことではないし、社会的な足場掛けのことでもない。それは、可能態 (becoming) としての社会的個人の生きられた振舞い (performance) の場と、振舞いそれ自体とのあいだに弁証法的に紡がれていく発達の活動そのものを指している。

つまり、「なりうるものになって振る舞ってみる」ということが最近接発達領域の生成において本質的なものであり、人間の学習-発達にとって根源的な営みであると考えるのである。

著者が捉えようとするのは、このような学習-発達の生じる場や環境と学習-発達の生成との動的な弁証法的繋がりであり、このような実践的弁証法が如何に生成されるのかという問題である。そしてこの問題へ向かう一つの手がかりとして同著で示される方法論が、ヴィゴツキーに依拠して提起される「道具と結果メソドロジー (tool and result methodology)」(p.9) である。

4. 道具と結果メソドロジー (tool and result methodology)

心理学の方法論において歴史的に根付いてきた主要なアプローチは人間についての科学的探求を志向するものであった。人間を科学的な方法論との結びつきの内に理解することが目指され、20世紀半ばまで人間を機械論的なメタファーによって理解しようとする動向が台頭した。個としての人間は互いに切り離された存在として捉えられ、周囲の環境からも分け隔てられて考えられた。このような動向の中で採用された心理学の方法論は、二元論的な心理学的概念づけに依拠するもので、何らかの結果を導き出すために諸種の道具を動員するアプローチとして概説できるものであった。このようなアプローチを著者は「結果のための道具メソドロジー (tool for result methodology)」(p.9) と呼び、日常の生活世界における多様な問題を、何らかの道具の動員によって「解決」していくことを志向する方法論として特徴づける。

著者によれば、このような人間研究に向かう二元論

的な方法論に対しヴィゴツキーは質の異なる方法を着想した。彼は人間についての科学的探求は二元論的ではなく弁証法的に展開する必要があると考えた。ヴィゴツキーの志向した方法は、人々の社会的な活動の脈絡の中にその都度道具が生成され、その道具の使用によって何らかの成果が生み出されていくような、道具と結果との双方が活動の中で同時に生成されながら連続的な発達の漸進プロセスを構成していくその実相を捉え得るようなものであった (p.9)。すなわち、人間の社会、文化、歴史的な発達のダイナミクスを出来事の脈絡から切り離さずに探求することを可能にするようなものであった。その方法論的目的は、問題の解決を志向するものではなく、問題を可視化し、我々の日常的な問いに視座を与える道具として機能するものとして特徴づけられる (p.10)。ヴィゴツキーの志向したこのような方法論を著者は「結果のための道具メソドロジー」に対置して「道具と結果メソドロジー (tool and result methodology)」と呼び、著者の理論的、実践的取り組みの根幹としている。

5. 生きられた振舞い： パフォーマンス

著者は、人々の生活世界の中での多様な振舞いを「パフォーマンス (performance)」 (p.30) という概念で説明する。この概念は、著者の主張に関わる主要概念の一つでもある。ところが、ここで言われる「パフォーマンス」という概念は日本語に馴染み難いものである。前節では「生きられた振舞い」と訳したが、著者のいうパフォーマンスとは、社会的、文化的な脈絡の中での人々の活動、行為、情動、思考の総体的営為を示しており、何らかの世界を生きるということと同義だと推察される。ここでいう世界は日常的現実には留まらない。むしろ、日常的現実から超え出て可能性の世界の中で「今の自分ではない何ものかになって振る舞ってみる」ことが人間の学習-発達に根源的なものであるというのが本書の一貫した主張でもある。要約するならば、著者は人間が可能性の世界の中で、他者や道具と協同的に展開していく意味構築プロセスに参加している多様な状態を総称して「パフォーマンス」と呼んでいるのである。

パフォーマンスという概念の説明において著者の分かり易い例の一つは、幼少の子ども達の学習と発達との関係に見出すことができる。幼い子ども達の日常において、学習と発達とは社会的なやりとりの中で不可分に展開している。子ども達は自分を取り巻く環境の中で話したり、聞いたり、食べたり、着替えたり、真似をしたりすることを通して学び、発達する。また幼児が「ごっこ遊び」に興じている時、彼らは普通の生活では「なれないなにか」になって、場面や状況を想像し、役割を創造的に模倣し（他者を取り込み）ながら楽しんでいる。いわば、遊びの中で子どもたちは、自分の日常的な振る舞いを超え出て楽しんでいるのである。この例に見るように、幼少の子どもにおいては自らの生活世界や可能性の世界を生きるということが、学習-発達というひと繋りの単位になって展開している。

ところが著者が危機感を呈するように、一般的には年齢が進むにつれ、このような学習と発達とが創造的に結びつくような生きられた振舞いの場は次第に失われていく。自分に馴染みの日常的な振る舞い方を超え出て、他者と共に新たな社会的実践を創造していくような活動に従事していく機会は次第になくなっていくのである。学校教育では、学習と発達とは分けて捉えられ、認知と感情とは別個のものとして扱われる。いわば人々の日常的な活動が、二元論的な枠組みの中に落ち込んでいってしまうのである。こうした危機を、関係と活動を軸として社会的実践の脈絡の中に克服していこうとするのが著者の実践的な挑戦である。そしてこの克服のキーワードとして著者が重視するのがヴィゴツキーに依拠して提示される「道具と結果メソドロジー」、「創造的模倣」、「即興」、「協同」といった概念である。これらの概念を鍵として著者は学習と発達とが統合的に展開していくような活動の場を人々と協同で創り出している。本書の二章、三章、四章、五章はその紹介であると言ってもよい。

6. 可能性への弁証法

マルクスにおいても、ヴィゴツキーにおいても、人間は社会的な存在であり、世界と共存する存在であった。彼らにとって人間は、歴史的な存在として自らの住まう世界を創りだし、その世界を創り直していくこ

とのできる可能的存在である。この視点に立つならば、社会的存在としての人間の歴史と生活の生成は、絶えず「そうなりうる (becoming)」というプロセスに巻き込まれる中で漸進してきたと言える。従って、この文脈における人間学的な問いの立て方は人々が「今誰であるのか」、「どうしてそうなったのか」という問い方ではなく、人々が「今の自分ではないなにか」に「いかにしてなりうるか」ということを問う問い方になる。この問い方は著者の、人々が「今の自分ではないなにかになること」を助ける一連の実践的活動と結びついて理解される。

著者において、ここでの「なにかになる」活動は、個人的な営みではない。著者は、マルクスを経由するヴィゴツキーに依って「もし人間の発達が生社会—文化—歴史的過程を通して弁証法的なものであるならば、心理学の研究対象は、現存在としての個人の精神内ではなく、可能性の創出と結びついた社会的活動で

ある」(p.107)とし、社会的、集团的、重奏的に構築される活動の可能性とその意義を強調する。

教育、心理療法、企業、コミュニティビルディングの現場における実践的活動をヴィゴツキー理論に依拠して展開してきた著者の取り組みは、ヴィゴツキーを心理学理論の内に留めおらずに、実践的な文脈に位置づけなおすことによって同理論の可能性を拡張する。いうなれば「実践の中のヴィゴツキー」とも言うべき著者のヴィゴツキー解釈には理論研究の文脈からの異論も多分に想定され得るが、社会的実践の現場に身をおく人々にとって「実践のヴィゴツキー」の魅力は深いものである。

マルクスとヴィゴツキーに依拠して展開する共同体の変革と自己の変革の双方を見据えた著者の実践的論考は、社会情報学の探求において実りある示唆を与え得るものである。

文献

Holzman, L. (2009) . Vygotsky at work and play. NY: Routledge.